

自ら入所したい施設を目指して
- 身体拘束廃止を処遇向上のスタートに -

ひろみ奈良の里

1 施設の概要

介護老人福祉施設 定員 50 名
平成 13 年 5 月 1 日開設

2 身体拘束廃止に向けた取り組み

職員自らの発意により、平成 13 年 11 月、介護・看護・厨房等の各部門から 1 名以上選出した委員で構成する検討委員会を設置し、全職員に「身体拘束ゼロへの手引き」を配布して、身体拘束ゼロの理念の理解を図った。そしてその検討結果をケアカンファレンス（月 4 回）に反映させるなど、従前からのケアを見直すこととした。その取り組みの中、平成 14 年 3 月、モデル施設として、身体拘束廃止支援チームとともに「身体拘束ゼロ」に向けて取り組む機会を得ることとなった。

3 具体的事例

【事例 1】 ミトン及び抑制ひも

取り組み前の状況

80 歳代、女性。退院に伴い入所したものである。脳梗塞後遺症による右完全麻痺、寝たきりであり、自力での寝返りもできない。要介護度 5。発語は簡単な挨拶以外にほとんどみられない。入院中に造設した胃ろう部から、経管栄養により栄養を摂取している。

入院中から皮膚の掻痒感があり、皮膚の損傷が激しく、また、皮膚を掻きむしる際、胃ろう部に手が触れ、カテーテルを抜去する可能性があったため、入院時に引き続き、当初はミトン、抑制ひもを使用していた。

取り組み後の状況

清潔保持のために、週 2 回の入浴に加えて毎日の清拭や軟膏塗布を実施した。また、従来から着用していたポリエステル素材の肌着も皮膚の掻痒感を生む原因の一つと考え、家族の協力で綿素材の肌着を用意し、頻繁に肌着を取り替える等した結果、皮膚の掻痒感が軽減し、皮膚を掻きむしる行為が著しく減少した。

また、経管栄養終了後には必ず接続チューブを外すほか、経管栄養時にチューブを寝衣の下から襟元に出すなど、カテーテルを抜去しないための工夫を行った結果、ミトン及び抑制ひもの完全除去を達成した。入所者は、発語も以前に比べて多くなり、精神状態が安定した。

【事例 2】 介護衣（つなぎ服）

取り組み前の状況

70歳代、女性。車椅子の使用。昼夜を問わず、失禁があった。また、夜間のおむつ外しによるベッド上での失禁及び放尿行為が頻繁にあった。そのため、入所後1ヶ月経過時に、夜間帯に介護衣（つなぎ服）を着用していた。

取り組み後の状況

介護衣（つなぎ服）着用の代替策として、排泄パターンの把握とこれを目安としたトイレ誘導を実施することとした。また、日中の離床を促して良好な導眠を図るとともに、不快感軽減のため、夜間巡回時のおむつ交換を1晩あたり2回実施することから取り組みを開始し、さらには、段階的におむつの使用を止めて、紐付きズボンやリハビリパンツの着用などで経過観察した。

これらの過程で、昼間の失禁が激減し、また、度々無意識にズボン等を脱ぎ捨てるものの、夜間の放尿行為も減少し、介護衣（つなぎ服）の着用が不要となる。さらに、自らトイレへ歩いて行こうとするなどの変化があったので、歩行訓練を導入した。

現在では、入所者及び家族の意思を尊重して、行動を制約していないが、入所者の状況に応じて対応しているため、転倒することも少ない。家族からは、以前に比べて表情が豊かになったと、喜ばれている。また、利用者の摂食量は以前よりも増加した。

最近、夜間の放尿行為が再び増えてきたため、夕食後や就寝前のトイレ誘導も追加して実施したところ、充分対応できている。

4 取り組みの効果

身体拘束は現時点でゼロを達成（平成14年9月現在）。

職員間及び家族とのコミュニケーションが向上した。

入所者の解決すべき課題とその解決策を多角的に評価、立案する意識が芽生えた。

入所者の心身の状態が安定し、生活の質及び自立性が向上した。

処遇困難等の理由で安易に拘束することがなくなり、業務体制や日課、週間スケジュールの見直し、工夫による解決を図るようになった。

入浴業務の負担軽減による介護のゆとりを創出することにより、処遇困難事例等を中心とした見守り体制を強化すること及び入所者の希望に応じて週3日以上の入浴を可能とすることを目的として、入浴日を従来の週2日から週4日に増やすための検討を始めた。

同一法人内の他施設関係者を招いて身体拘束廃止事例発表会を開催し、処遇困難ケース等について意見交換を行う等したところ、この意見交換が他の施設における処遇向上に向けた意識改革の契機となる等、波及効果が発生した。

5 施設職員の意見

- α事故発生に際しては、施設全体の責任として対応することを明確にした結果、介護職員や看護職員が必要以上に不安を感じることなく、身体拘束廃止に取り組むことができた。
- α入所者個々について、徹底的に課題分析を行うこととし、この課題分析に基づいて現場が作成した介護方針を最大限尊重した。
- α職員はリスクマネジメントの学習、実行を併せて行っていくことが肝要である。
- α従来の介護のあり方を当たり前と考えず、入所者の立場で発想することで、身体拘束はなくすことができることがわかった。
- α取り組み開始当初は、夜勤時の負担等から、職員の間でも不満が多く、何度も挫折しそうになったが、身体拘束の廃止と処遇の向上という大きな方針があったので、全職員が一丸となって取り組むことができた。
- α検討委員会メンバーがリーダーシップを十分に発揮した結果が、身体拘束ゼロや入所者の処遇向上につながったと思う。
- α取り組みを進めるにつれて、入所者の表情に大きな変化がみられるなど、成果が目に見える形で出たので、続けることができたのだと思う。また、以前に比べて職員の気持ちにも次第にゆとりが生まれてきたように感じる。
- α身体拘束ゼロはあくまでも入所者の処遇向上へのスタートである。今後、他の施設の状況も参考にしながら、入所者にとってのよりよいケアを目指したい。